医療現場：リハビリテーション部

テーマ：アームスリング

■ 背景

- 脳卒中の患者さんは、麻痺により麻痺した側の肩が痛い、腕が重い、肩を痛めてしまわないために、アームスリングを使うことが多い。
- 現状のアームスリングは右図のように、吊り下げ方式のものが　ほとんどである。
- 上記のような症状や要求に対して、現状のアームスリングは対処療法的には有用であるが、関節や筋肉の萎縮が懸念される。
- 介助側が介護・管理しやすいという理由から、アームスリングを使用している場合もある。

【現状の実例】

■ 現在の状況、対応方法

- 右上図のような吊り下げ方式のアームスリングを使用する。
- 昔ながらの白い三角巾を利用して、右上図を同じように吊り下げる。
- 病院のスタッフが手作りしたアームスリングで対応する。

■ 現在の課題

- 吊り下げ方式のものしかなく、結果的に固定した状態と同じになり、関節や筋肉の萎縮や硬化が進む。
- 患者さんが吊り下げ式のものに慣れてしまって、自発的にリハビリをしようとしなくなる。
- 手を覆ってしまうために手に感覚が入りにくい、姿勢が非対称になりやすくバランスも悪くなってしまう。

■ 使用頻度や市場性（マーケットサイズ）

- 日本福祉用具・生活支援用具協会が関連企業にアンケート調査を実施して集計した市場規模は、およそ1 兆3,810 億円（2015年）であった。
  出典：「平成29年度 特許出願技術動向調査報告書（概要）」（特許庁平成30年2月）
- ご参考
  世界の医療用リフティングスリングの市場規模：6億1,080万US$（2021年）
  （2022年から2028年までの予測期間中のCAGRは10.8%と予測）
  出典：株式会社グローバルインフォメーション
  https://www.gii.co.jp/report/anvi1164926-medical-lifting-slings-market-covid-impact.html

■ 解決策案の例（概念のみ）

＜イメージ図＞

機能アイデア例

- 肩を下（脇の下）から支えるような機能
- 肩関節等の自由度が保たれが、肩の痛みや腕の重さを軽減できる機能

■ リハビリテーション部ホームページ

http://www.shiga-med.ac.jp/hospital/doc/department/central_clinic/rehabilitation_dep/index.html